

第1章 概要・機能

概要

保健発達部は平成10年4月に発足した。子どもの健康、疾病の予防に関わることと、子ども、とくに乳幼児の発達の異常に関わることを目的としている。

埼玉県では年間5,000人の障害児および境界児が発生していると推計された。このような子ども達に対し、予防はもとより障害を早期に発見し治療や訓練を行うことが重要であるとの認識が高まり、子どもの発達を促す機構の設立が検討され、平成7年3月、埼玉県小児発達促進センター（仮称）基本計画策定委員会の答申書が出された。これに基づき、大宮小児保健センターの移転をも合わせて、平成8年8月に着工、平成10年3月に総面積3,858.93㎡の鉄筋コンクリート2階建施設、「保健発達棟」として小児医療センター敷地内に完成した。

昭和42年8月、大宮市土呂町に全国で3番目の小児専門医療施設として「埼玉県小児保健センター」が開設され、昭和58年4月に埼玉県立小児医療センターの開設に伴い、「埼玉県立小児医療センター付属大宮小児保健センター」として、子どもの健康増進、疾病の早期発見、地域小児保健活動の援助など小児保健活動を行ってきた。平成10年3月をもって小児保健センターは30年間の歴史を終え、埼玉県立小児医療センターに完成した保健発達棟に移転した。

平成10年4月、新規事業としての発達部門と大宮小児保健センターでの事業継続である保健部門とを合わせ、保健発達部とし、診療機能を踏まえた名称で「保健発達センター」としてオープンした。

平成13年1月、埼玉県予防接種センターが併設された。

平成17年6月、理学療法士、作業療法士が各1名増員され、総合リハビリテーション施設Aの認定を取得した。

機能

1. 保健部門

県内の小児保健の中核としての機能を果たす。そのための、機能として

- 1) マスククリーニング検査：県内（さいたま市を除く）出生時全てに対し先天性代謝異常症、内分泌異常のスクリーニング検査の実施・報告と異常児に対する事後措置
- 2) 予防接種センター：地域医療機関、保健機関で予防接種施行が困難な児への評価と接種、予防接種相談、予防接種の情報提供と啓発、医療・保健担当者の指導、海外渡航、移住に伴う予防接種の実施
- 3) 専門外来の実施：小児医療センター内、地域医療機関、保健機関等からの紹介児を対象とする
 - (1) 精神保健外来：情緒・行動の問題、学童期の発達障害の診療、カウンセリングとコンサルテーション、虐待防止対策（虐待防止チームと連携しての評価と相談、関係機関との連携）
 - (2) 生活アレルギー外来：アレルギー疾患の評価、生活指導、治療
 - (3) 成長発育外来：成長発育異常の児の評価、生活指導、治療
 - (4) 遺伝外来：出生前、出生後の先天異常の診断、相談、生活指導と発達評価
 - (5) 心臓検診外来：一次スクリーニングで異常（又は疑い）が指摘された児に対する精密健診と事後措置
 - (6) 夜尿・遺尿外来：夜尿・遺尿症の診断、相談、生活指導、治療
 - (7) うさぎ外来：排便障害の診断、相談、生活指導、治療
- 4) 育児支援：電話相談、面談相談、デイケア指導、多職種プログラム外来・集団外来（後述）での育児支援
- 5) 小児保健協会（本部：保健発達部内）による小児保健に関する啓発事業と地域指導者育成に積極的に協力
- 6) その他：小児保健に係わる全般の活動

2. 発達部門

院内、地域医療機関、保健機関等からの紹介児を対象とする。また、県内における小児発達支援のための中核としての機能を果たす。そのための、機能として

- 1) 発達評価外来：発達を総合的に評価して事後措置につなげる
 - (1) スクリーニング外来：医師による発達の評価とスクリーニングをおこなう
 - (2) アセスメント外来：スクリーニング外来で更に精密で多角的な評価が必要な児について医師、看護師、作業療法士、言語聴覚士、臨床心理士、保育士等多職種による総合的発達評価をおこなう
 - (3) フィードバック外来：アセスメント外来での結果を説明し、その後のケア、指導をおこない、訓練につなげる
- 2) 発達支援外来：機能訓練とその評価、指導を主体とする外来
 - (1) 発達外来：医師による発達障害の評価と医学的診断、生活指導と治療、経過観察
 - (2) 理学療法外来：理学療法士による主に粗大運動機能改善、哺乳摂食機能改善、呼吸機能改善のための評価、訓練、指導
 - (3) 作業療法外来：作業療法士による主に微細運動機能改善、感覚統合機能改善、日常生活活動技能改善のための評価、訓練、指導
 - (4) 言語聴覚療法外来：言語聴覚士による主に発達障害、難聴、口蓋裂、気管切開等に伴う言語遅滞に対する評価、訓練、指導
 - (5) 心理外来：臨床心理士による主に発達評価とカウンセリング
 - (6) 視能訓練外来：視能訓練士による主に視機能評価と訓練、指導
- 3) 多職種集団外来：同一疾患を有する児と家族をグループで集め、多職種による総合的評価、訓練指導を多角的におこない、併せて家族間交流を図る機能を有する
 - (1) DK外来：ダウン症児を対象とする。医師、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、臨床心理士、栄養士、歯科衛生士、ケースワーカーが担当
 - (2) SH外来：重症心身障害児を対象とする。医師、理学療法士、看護師が担当
 - (3) PW外来：プラダーウイリー症候群の児を対象とする。医師、看護師、理学療法士、作業療法士、臨床心理士、栄養士、ケースワーカーが担当
 - (4) すくすく外来：超低出生体重児を対象とする。医師、看護師、理学療法士、作業療法士、臨床心理士、言語聴覚士、作業療法士、栄養士が担当
 - (5) かぶとむし外来：二分脊椎症児を対象とする。医師、看護師、理学療法士、作業療法士が担当
 - (6) もぐもぐ外来：哺乳・摂食障害児を対象とする。医師、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、臨床心理士、栄養士、歯科医師が担当
 - (7) ことばコミュニケーション外来：発達障害による言語遅滞児を対象とする。医師、看護師、言語聴覚士、保育士が担当
 - (8) 難聴ベビー外来：0歳の難聴児を対象とする。医師、看護師、言語聴覚士、音楽療法士、ケースワーカーが担当
 - (9) 気管切開児外来：気管切開児を対象とする。医師、看護師、言語聴覚士が担当
- 4) 装具診外来：整形外科医、理学療法士、作業療法士による装具の適応検討と処方をおこなう
- 5) 発達支援のための啓発と教育、地域連携、研究会、研修会の開催、学生研修、地域指導者育成、講師派遣、地域保健機関・発達機関関係者との情報交換
- 6) その他、発達支援に係わる全般の活動

少子高齢化の危機が叫ばれて久しい昨今、日本の総人口は約12,748万人台（平成24年9月1日現在、総務省統計局）20才未満人口は2,261万1千人となり、前年と比べてさらなる減少を示した。量だけではなく、今まで以上に小児医療・保健の質の向上が期待される。

より良質な小児保健、発達支援を推進するためには、子どもの人権尊重を基本として時代に即した新しい考え方や方法論を導入し、積極的に問題を提起・解決することが大切である。

同時に心身両面にわたる小児リハビリテーション訓練施設の充実や小児リハビリテーションに係る専門家の育成も解決すべき今後の重要な課題である（ここで云う小児のリハビリテーションは成人疾患における機能回復訓練とは異なり、発達障害児の医学的診断・治療、心理分析、微細運動・感覚統合機能改善をおこなう作業療法、さらに発達障害、難聴、口蓋裂、気管切開児の言語・聴覚療法や粗大運動・哺乳摂食機能の改善に取り組む理学療法から構築されており、障害を有する小児の機能の発達を統合的かつ積極的に促進する医療である）。

保健発達部は県内はもとより日本の子どもたちやそれを支える人々に、オピニオンリーダーとして魅力あふれるメッセージを発信すると共に必要十分な訓練環境を提供し、同時にこれに係わる専門家を育成することに重大な任務を負っている。このことを常に念頭に置いて今後の活動を進める。

第2章 小児保健業務

1 地域保健業務

埼玉県予防接種センター

平成13年2月に知事より指定されて埼玉県予防接種センターとなった。その目的は、県内市町村が行う予防接種事業の支援策として、県疾病対策課とともに、県民が安心して予防接種を受けられる体制作りに協力するものである。業務の内容は次の3本柱からなっている。

市町村からの依頼又は紹介による予防接種の実施。予防接種の実施は、当センター予防接種・国際保健外来で行っている。市町村と当センターとの予防接種委託契約は平成23年4月1日現在、65市町村（41市23町1村、うち県内40市21町1村）と結び、県内で結んでいないのは遠方の2町のみである。

予防接種担当者又は医療関係者からの予防接種医療相談。2011年度の医療相談事業の件数 311件（前年比128件減）で、内訳は電話275件（59件減）、メール36件（62件減）、Fax 0件（7件減）で、市町村予防接種健康被害調査委員会は2011年11月富士見野市、2012年1月三郷市で開催された。

市町村予防接種担当者に対する情報や知識の提供。平成16年7月1日より毎月1回メールで県内全市町村および希望医療機関に「埼玉県予防接種センターだより」をだしている。今年度はNo 2011-01からNo 2012-03まで送信した。

(川野豊・松永光平)

2 保健教育活動

小児の疾病・保健対策として最も重要なのは、予防と早期発見対応である。そのためには地域でのレベルアップ、教育・啓蒙活動は必要不可欠である。そのため、3次医療機関の蓄積された情報を活用しながら、地域で活動している小児保健関係者に、基礎知識および最新情報を提供している。また、相談・質問・要望を受け、全県下を対象にバックアップする活動を行っている。

埼玉県小児保健協会

日本小児保健協会の埼玉県支部でもあり、保健師・看護師・助産師・養護教諭・医師・コメディカル・福祉関係者等が参加している。当協会の目的は、小児保健全般に関する研究、知識の普及と、その事業の発展をはかり、小児保健・福祉を増進するためである。その事務局が当センター内にあり、中心となって企画・運営を行っている。平成23年度は以下の事業を行った。

1. 第75回研究会・平成23年度総会

(平成23年6月11日(土)、さいたま市民会館)

講演「食物アレルギーの最近の話題」 (小俣貴嗣)

講演「特別支援教育の4年間：発達支援相談室での相談から」 (尾崎啓子)

<ミニシンポジウム：食事に問題を抱える子どもたちへの対応>

「幼児保育の現場で食事に関わる問題とその対応」 (並木由美江)

「食物アレルギーの子どもたちへの栄養指導」 (長谷川実穂)

「運動機能に問題を抱える子どもたちへの摂食指導」 (高見葉津)

講演「予防接種の動向2011」 (松永光平)

2. 第76回研究会・日本小児保健協会公開セミナー

(平成23年10月1日(土)、ラフレさいたま)

「現在の自閉症の考え方と対応の基本」 (平岩幹男)

「自閉症療育についての国際的な潮流」 (小澤至賢)

「小さなできるをもっと大きく -自閉症の療育の実際-」 (舛永理早)

「保護者の立場から」

(末吉景子)

「自閉症を抱える子どもの就学準備と学校生活」

(長谷川博之)

3. 第3回埼玉小児保健セミナー

(平成24年1月14日(土) さいたま市民会館おおみや・小ホール)

講演「発達障害とは何か、基本的な理解と対応」

(平岩幹男)

講演「乳幼児健診と発達障害」

(平岩幹男)

講演「自閉症の早期発見とM-CHAT」

(神尾陽子)

講演「ADHDの診断と対応」

(宮島 祐)

(南谷幹之・川野豊・松永光平)

3 保健予防業務

マス・スクリーニング

(1) 先天性代謝異常症等マス・スクリーニング

新生児を対象に4疾患の先天性代謝異常症(フェニルケトン尿症、メープルシロップ尿症、ホモシスチン尿症、ガラクトース血症)、また先天性甲状腺機能低下症(クレチン症)と先天性副腎過形成症の合わせて6項目のマス・スクリーニングを実施している。

平成23年度は48,904名の検査を行い、その中で平成24年7月1日現在クレチン症5名と副腎過形成症1名の患児が確定している。

また、タンデムマス法を用いた新生児スクリーニング検査の次年度導入を目指し検討に入っている。

表 マス・スクリーニングの年度別患者発見数

年 度	H元～10	11～20	21	22	23	合計
受検者数	575,360	577,001	49,517	49,249	48,904	1,300,031
再検査者数	19,018	23,521	2,098	1,800	1,944	48,381
フェニルケトン尿症	10	5	1	1		17
メープルシロップ尿症	1	1				2
ホモシスチン尿症	1	0				1
ガラクトース血症	6	7		1		14
クレチン症	92	165	26	11	*5	294
先天性副腎過形成症	26	20	2	1	*1	49
						*H24年7月1日現在

第3章 外来業務

1 総括

保健発達センターの外来診療は保健部門と発達部門とに分けることが出来る。保健部門は、医療機関の他に乳幼児健診や学校検診等で見つかった、心身に問題をもつ子どもたちを診療し、予防接種も行っている。発達部門は、乳幼児期に発達に問題があるとされた子どもたちの診断と経過観察、指導をおこなっている。

(川野豊・松永光平)

保健発達部門診療科別外来延べ患者数（平成23年度）

区分	診療月 診療実日数	4月			5月			6月			7月			8月			9月		
		新来	再来	合計	新来	再来	合計	新来	再来	合計	新来	再来	合計	新来	再来	合計	新来	再来	合計
保健部門	精神保健	8	346	354	8	360	368	16	443	459	7	388	395	11	444	455	5	357	362
	予防接種	197	155	352	214	163	377	218	138	356	159	156	315	149	158	307	190	131	321
	生活アレルギ-	0	5	5	0	3	3	0	1	1	7	24	31	10	30	40	2	21	23
	成長発育	3	32	35	3	14	17	8	12	20	5	21	26	10	54	64	3	18	21
	夜尿・遺尿	9	115	124	4	109	113	2	96	98	7	108	115	11	99	110	7	133	140
	遺伝相談	0	3	3	7	3	10	2	2	4	0	2	2	1	4	5	0	2	2
	国際保健	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	心臓検診	2	35	37	6	19	25	47	49	96	44	53	97	25	64	89	2	71	73
	腎臓検診	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	生活習慣病	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	思春期	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	一般保健	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
延べ患者数計	219	691	910	242	671	913	293	741	1,034	229	752	981	217	853	1,070	209	733	942	
1日平均患者数	11.0	34.6	45.5	12.7	35.3	48.1	13.3	33.7	47.0	11.5	37.6	49.1	9.4	37.1	46.5	10.5	36.7	47.1	
発達部門	発達外来	21	335	356	15	257	272	27	340	367	24	325	349	27	370	397	16	297	313
	装具外来	0	72	72	0	52	52	1	60	61	0	52	52	0	66	66	0	82	82
	スクリーニング外来	5	20	25	4	15	19	8	16	24	5	21	26	9	23	32	11	19	30
	アセスメント外来	0	9	9	0	11	11	0	12	12	0	12	12	0	17	17	0	12	12
	多職種外来	0	232	232	0	230	230	0	273	273	0	232	232	0	293	293	0	209	209
	延べ患者数計	26	668	694	19	565	584	36	701	737	29	642	671	36	769	805	27	619	646
	1日平均患者数	1.3	33.4	34.7	1.0	29.7	30.7	1.6	31.9	33.5	1.5	32.1	33.6	1.6	33.4	35.0	1.4	31.0	32.3
合計	延べ患者数計	245	1,359	1,604	261	1,236	1,497	329	1,442	1,771	258	1,394	1,652	253	1,622	1,875	236	1,352	1,588
合計	1日平均患者数	12.3	68.0	80.2	13.7	65.1	78.8	15.0	65.5	80.5	12.9	69.7	82.6	11.0	70.5	81.5	11.8	67.6	79.4

10月			11月			12月			1月			2月			3月			累計		
新来	再来	合計	新来	再来	合計	新来	再来	合計	新来	再来	合計	新来	再来	合計	新来	再来	合計	新来	再来	合計
20	20	19	19	21	21	244														
10	460	470	6	370	376	7	442	449	5	426	431	5	404	409	12	453	465	100	4,893	4,993
212	255	467	145	331	476	111	312	423	89	222	311	88	223	311	86	280	366	1,858	2,524	4,382
3	16	19	3	26	29	5	30	35	2	22	24	3	23	26	2	43	45	37	244	281
2	8	10	2	10	12	5	13	18	5	10	15	4	15	19	4	24	28	54	231	285
1	94	95	4	105	109	5	91	96	5	127	132	2	98	100	3	129	132	60	1,304	1,364
0	4	4	1	3	4	0	6	6	0	2	2	1	4	5	0	4	4	12	39	51
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2	39	41	1	32	33	1	62	63	5	41	46	1	28	29	4	61	65	140	554	694
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
230	876	1,106	162	877	1,039	134	956	1,090	111	850	961	104	795	899	111	994	1,105	2,261	9,789	12,050
11.5	43.8	55.3	8.1	43.9	52.0	7.1	50.3	57.4	5.8	44.7	50.6	5.0	37.9	42.8	5.3	47.3	52.6	9.3	40.1	49.4
23	296	319	19	314	333	22	288	310	18	318	336	23	311	334	24	307	331	259	3,758	4,017
0	71	71	0	79	79	0	67	67	0	49	49	0	61	61	0	60	60	1	771	772
7	29	36	9	25	34	9	26	35	8	25	33	7	24	31	10	27	37	92	270	362
0	9	9	0	16	16	0	13	13	0	6	6	0	16	16	0	16	16	0	149	149
0	267	267	0	284	284	0	240	240	0	252	252	0	270	270	0	219	219	0	3,001	3,001
30	672	702	28	718	746	31	634	665	26	650	676	30	682	712	34	629	663	352	7,949	8,301
1.5	33.6	35.1	1.4	35.9	37.3	1.6	33.4	35.0	1.4	34.2	35.6	1.4	32.5	33.9	1.6	30.0	31.6	1.4	32.6	34.0
260	1,548	1,808	190	1,595	1,785	165	1,590	1,755	137	1,500	1,637	134	1,477	1,611	145	1,623	1,768	2,613	17,738	20,351
13.0	77.4	90.4	9.5	79.8	89.3	8.7	83.7	92.4	7.2	78.9	86.2	6.4	70.3	76.7	6.9	77.3	84.2	10.7	72.7	83.4

2 保健外来

1) 予防接種・国際保健外来（埼玉県予防接種センター）

地域で予防接種を受けられない方に対して、埼玉県予防接種センターとして予防接種を行っている。定期接種では市町村長の依頼書と主治医の紹介状と2通持参する。任意接種では保健医療機関からの紹介状で受診している。平成24年4月1日現在、64市町村（県内40市20町1村、茨城県1市2町）と当センターが予防接種契約を結んでいる。契約を結んでいないのは、県内では2町のみである。

2011年度の予防接種外来は、新患数1,858名（前年比961名減）である。紹介元は市町村保健センターが多い。予防接種件数は7,586件（前年比819件減）である。埼玉県予防接種センターになった2001年度と比較すると、予防接種件数は約4.1倍に増えた。

（川野豊 松永光平）

表1 2011年度予防接種等の件数

ワクチン等	0～2歳	3～5歳	6歳～	合計	前年比
B C G	52	1	0	53	-35
三種混合DPT	207	4	18	229	-114
二種混合DT	1	0	66	67	32
破傷風	0	0	239	239	92
ポリオ	850	52	1087	1979	-1076
麻疹	1	0	8	9	5
風疹	0	0	3	3	2
麻疹風疹混合	67	13	92	172	1
日本脳炎	52	54	276	380	67
インフルエンザ	108	128	247	482	-207
ムンプス	24	9	23	56	-1
水痘	25	7	8	40	-7
B型肝炎	109	73	512	694	151
A型肝炎	65	68	512	645	151
狂犬病	34	42	330	406	107
肺炎球菌 PCV7	169	12	1	182	-75
肺炎球菌 PPSV	0	1	5	6	-4
Hib	167	7	2	176	-155
シナジス	1723	0	0	1723	203
ツベツクリン反応	2	1	5	8	7
ロタウイルス				2	2
ヒトパピローマウイルス				35	35
合計	3656	472	3434	7586	-819

2) 心臓検診外来

心臓検診外来は、学校心臓検診の精密検査（主に三次検診）・学校心臓検診後の経過観察・循環器外来の年長患者さんの経過観察・心房中隔欠損カテーテル治療前後の外来、などを中心に行っている。通常は毎週木曜日の午後で、学校心臓検診の時期・夏休みは火曜日の午後も行っている。新患は殆どが学校心臓検診の、二次・三次検診の受診者で、小学生と中学生が全体の88%を占めている。新患数は、160名前後で推移している。

疾患別では、不整脈が全体の66%（107名）で過半数を占めている。内訳は心室性期外収縮（48名）、上室生期外収縮（9名）、WPW症候群（20名）、QT延長症候群（15名）、などであった。QT延長症候群が多かったのは家族検査が重なったためである（4家系で11名が受診）。

先天性心疾患では、心房中隔欠損が最も多く（11名）、心室中隔欠損（1名）、僧帽弁逸脱・閉鎖不全（4名）なども診断されている。心房中隔欠損は、Amplatzer閉鎖栓でのカテーテル治療開始以後は診断率が向上し、10名以上の診断がなされている。

検査部門では、トレッドミル運動負荷試験は多い日には10例以上おこなっている。またQT延長症候群の遺伝子検査（他院への依頼）は積極的に行い、家族検査も積極的に行っている。家族検査から御家族の致死的な疾患の診断がなされ、治療が行われた場合もある。その他に、WPW症候群に対するATP & アミサリン負荷試験・秋から春先にかけての重症心疾患児に対するシナジス筋注（RSウイルスの予防で月1回を筋注行う）も並列して行っている。

今後も外来・検査室スタッフの協力のもと、外来内容の向上に努めたい。

表1 心臓検診外来新患の疾患別内訳（平成23年度）

1) 不整脈		2) 心疾患		2) その他	
心室性期外収縮	48	心房中隔欠損	11	失神	1
上室性期外収縮	9	心室中隔欠損	1	心筋症	0
WPW症候群	20	川崎病	1	マルファン	1
完全右脚ブロック	3	僧帽弁逸脱・閉鎖不全	4	異常無し	33
QT延長症候群	15	他の弁疾患	2	計	35
I・II°房室ブロック	4	その他	4		
上室・心室頻拍	4	計	23		
その他	4				
計	107				

表2 心臓検診外来新患の動向

	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度
就学前	0	2	3	2
小学生	71	62	77	73
中学生	86	87	82	70
高校生以上	12	10	18	16
計	169	161	180	161

3) 生活アレルギー

平成23年度の生活アレルギー外来の新患数は65名（前年比8名減）である。主たる病名では蕁麻疹8名、アトピー性皮膚炎5名、食物アレルギー45名、他疾患（気管支喘息、アレルギー性鼻炎、薬物過敏症、感染症（疑）等）7名である。紹介元は医療機関、院内他科、保健機関である。アレルギー性疾患に対しては、食物負荷試験、皮膚テスト（プリックテスト）・血液検査・問診・経過表・食物日誌などにより原因アレルゲンの検索を行った。保健指導はアレルゲン対策，環境の整備，スキンケア（保湿剤），対症療法（ステロイドおよび非ステロイド軟膏），薬物療法（抗アレルギー薬・抗ヒスタミン薬），食物除去等を行った。

（川野豊）

4) 夜尿外来

平成23年度は、金曜日の午前、午後を腎臓科の藤永周一郎、渡邊常樹が担当した。患者数は30-40人/日程度であった。当科の方針としては、まず生活指導（便秘改善、時間排尿）を行い改善がない症例に対して、薬物療法（デスマプレシン・点鼻スプレー、抗コリン薬など）や夜尿アラームを選択している。

近年、夜尿症治療に対するコンプライアンスやアドヒアランスの重要性が再認識されており、早期から有効な治療法導入が必要と報告されている。我々は重症例と思われる機能的膀胱容量の低下している患児に対して、早期のdry night達成のため、第一選択から「三者併用療法」（デスマプレシン・点鼻スプレー、抗コリン薬、夜尿アラーム）を行っており、その結果は、平成23年の日本夜尿学会で報告しており、優秀演題に選ばれた。今後、症例を増やし、三者併用療法の適応について、さらに検討していく予定である。

5) 成長発育外来

平成23年度の初診患者数は64名で、表に示すように低身長を主訴として受診した患者が最も多く全体の86%を占め、次いで発育障害（体重増加不良、やせ）が14%であった。

紹介元は、医療機関からの紹介が72%と最も多く、次いで市町村保健センターと小・中学校からの紹介が併せて20%であった。

（会津克哉）

平成23年度成長発育外来初診患者数

低身長	55
発育障害(体重増加不良など)	9

6) 遺伝相談外来

遺伝相談事業と遺伝相談外来

1) 遺伝相談外来：受診者41名の概要を表1に示す。2) 遺伝性・先天性疾患の集団外来：コストロ症候群（第3回；6家族）、コフィンシリス症候群（第1回；4家族）、バックウィズウィーデマン症候群（第3回；21家族）、4p-症候群（第2回；9家族）等の外来を行なった。3) 遺伝相談事業講演会：『特別支援教育の現状と今後の方向性について』（西牧謙吾先生、特別支援教育総合研究所）、『ダウン症児・者のいきいきとした生活のために』（巽 純子先生、近畿大学理工学部生命科学科）を開催した。4) ダウン症候群埼玉県内地域家族会の代表者による第6回家族会連絡会を開催した（23団体中、アンケート協力13団体、連絡会参加8団体）。

2011遺伝相談			
1. 単一遺伝子疾患		8トリソミー モザイク	1
難聴(コネキシン26異常)	10	+der(9)t(5;9)(q35.2;q21.33)	1
福山型筋ジストロフィー	2	+dic(15)(q11.2) モザイク	1
筋緊張性ジストロフィー	2	der(14;21)(q10;q10)+21	1
ミラーディーカー症候群	1	20pトリソミーモザイク(出生前)	1
先天性ミオパチー(RYR1 遺伝子変異)	1	21トリソミー	2
ヌーナン症候群関連疾患	1	21トリソミー / 骨形成不全症	1
球脊髄性筋萎縮症	1	遠位部22q11.2欠失症候群	1
神経線維腫症1型	1	t(X;9)(q21.1;p24)	1
耳口蓋指症候群 II型	1	dup(X)(p22.33p22.2)/del(X)(q26.3)(出生前)	1
ソトス症候群	1	3. 多因子遺伝病・その他	
エプスタイン症候群	1	発達障害	1
プロテインC欠損症	1	先天性心疾患	1
血友病A	1	発達障害・多発奇形	2
2. 染色体異常		脳瘤	1
del(1)(q43q44)	1		
		計	41

7) 精神保健外来

精神保健外来は、保健発達部の外来として、医療機関、保健機関、教育機関、福祉機関などから紹介された子どもと家族を診察している。平成23年度の新患数は101人。主訴（表1）、主たる診断名（ICD-10による：表2）、年齢（表3）、紹介元（表4）は以下の通りである。平成18年4月より県立精神医療センター児童思春期病棟が開棟したことにより、その役割分担を行ったことから、より低年齢の受診が目立っている。院内他科を経由する身体症状を伴った患者の診察を中心に今後も活動を展開していく方針としたため、院外初診は減少している傾向にある。他機関とも連携を取りながら、より効率的な受診状況を整えることが今後の課題である。

（舟橋敬一、平山優美）

表 1 2011年度精神科外来主訴別新規患者数

主訴	新規患者数（人）
1. 発達・言語の遅れ	7
2. 行動の問題	56
3. 不登校	12
4. 身体症状	5
6. 食行動の異常	4
7. 学校や園での緘黙	1
9. チック	6
11. 抜毛	2
13. 過度の不安	2
14. 抑うつ状態	3
15. 希死念慮・自殺企図・自殺行為	1
17. 虐待	2
	計101

表 2 2011年度精神科外来疾患別新規患者数

ICD-10 診断カテゴリー	新規患者数（人）
F4 神経症性障害、ストレス関連障害および身体表現性障害	
F41 他の不安障害	4
F43 重度ストレス反応 [重度ストレスへの反応]および適応障害	12
F44 解離性（転換性）障害	4
F45 身体表現性障害	2
F5 生理的障害および身体的要因に関連した行動症候群	
F50 摂食障害	3
F6 精神のパーソナリティおよび行動の障害	
F63 習慣および衝動の障害	2
F7 精神遅滞 [知的障害]	
F70 軽度精神遅滞	2
F71 中度[中等度]精神遅滞[知的障害]	1
F79 特定不能の精神遅滞[知的障害]	2
F8 心理的発達の障害	
F84 広汎性発達障害	49
F9 小児期および青年期に通常発症する行動および情緒の障害	
F90 多動性障害	10
F92 行為および情緒の混合性障害	1
F94 小児期および青年期に特異的に発症する社会的機能の障害	4
F95 チック障害	5
	計101

表 3 2011年度精神科外来年齢区分別新規外来患者数

初診時年齢区分	新規患者数（人）
幼児期前半	3
幼児期後半	8
小学前半	48
小学後半	34
中学生	5
高校以上	3
	計101

表 4 2011年度精神保健外来紹介元別新規患者数

診療科	新規患者数（人）
保健所	2
市町村保健センター	1
市町村福祉	1
児童相談所	13
他医療機関	83
その他	1
	計101

3 発達外来

1) スクリーニング外来 (担当：木野田、松本、南谷)

スクリーニング外来では、歩行可能な発達レベル（通常は1歳6ヶ月齢以上）で発達に何らかの問題を有する（主にことばが遅い）小児を内科的に診察し、器質的疾患の有無についての諸検査を行なう。さらに多職種による総合評価を要する症例に関してアセスメント外来を紹介している。

平成23年度の新規患者数99名であり前年度より17名増加した。保健所・保健センターからの紹介数は10名、医療機関からも4名共に増加していた。前年度に引き続き診療枠は縮小したままであるが、初診待機期間は1～2週間前後であり、待機期間の延長はない。初診患者の年齢構成は3歳が65名66%であり、2歳から4歳を合わせると96%を占めた。この比率は例年と変わらない。

初診された理由として「ことばの遅れ」が最も多く79名（80%）であり、「多動」および「こだわり・かんしゃく等」を合わせた行動の問題が43名（43%）でやや増加し、「会話不成立」等のコミュニケーションの問題は9名（9%）で減少し、集団生活で明らかになる「周囲に馴染めない」等の社会性の問題は13名（13%）で若干増加した。多少の増減は見られたが、例年の傾向と大きな変化はなかった。初診患者の多くは集団が開始される前であり、総じて社会性の問題についての訴えは多くないものと考えられた。

今年度は初診患者のうち60名、73%がアセスメント外来へ紹介された。

(南谷幹之)

紹介元	患者数 (名)
保健所・保健センター	50
医療機関	43
福祉機関	0
療育機関	0
教育機関	0
院内	0
不明	1
計	99

初診時年齢	患者数 (名)
1歳	0
2歳	17
3歳	65
4歳	13
5歳	4
6歳	0
7歳以上	0
計	99

紹介理由・主訴 (含重複)	患者数 (名)
ことばの遅れ	79
行動面の問題 (こだわり・かんしゃく等、除多動)	24
多動	19
集団に馴染めない	13
会話不成立	6
知恵の遅れ	4
吃音・発音・構音の問題	3
発達全般の遅れ	0
その他 (噛まないで食べる、運動の遅れ、ほか)	4
計	152 (重複有)

2) アセスメント（総合発達評価）外来（担当：田中、舟橋、秋谷、平山、南谷）

アセスメント外来は、スクリーニング外来および発達外来から依頼された1歳6ヶ月以降および就学前の発達に問題ある小児を複数の職種で評価をおこなう外来である。医師・看護師・作業療法士・言語聴覚士・臨床心理士の5名が約3時間かけて4～5組の患児親子に対し問診・診察・行動観察および評価を個別に行ない、視能訓練士および保育士が巡回する。直後に合同カンファレンスで患児の問題点を整理し、医師から患者家族に評価結果および指導方針を説明している。

H23年度初診患者総数は149名であり、前年度と比較して14名減少した。例年になく4～6月に予約を取ったもののキャンセルされた患者が多くみられたことが影響したと考える。診断の内訳は自閉症および類縁する発達障害例は合計129名であり12名減少したが、初診患者総数に占める比率は前年度と同様で87%であった。

事後措置については、院外・地域支援の継続をあらためて指示した、あるいは新規に紹介した例は158件（重複有、8件減少）、院内での訓練・支援を開始した例は66件（重複有、17件増加）であった。家族が児の発達特性への理解を深めるための勉強会である「ことば・コミュニケーション外来（非高機能）」はスタッフの体制が整わず再開に至っていない。院外紹介のうち、通園・訓練施設への紹介例は59件、5件増加した反面、保育所・幼稚園への加配等の配慮の依頼が65件、13件減少した。通園・訓練施設での個別的な指導に加え、地域における保育所・幼稚園での社会適応性向上のための指導の重要性は変わらない。

（南谷幹之）

診断名	患者数（名）	事後措置（含重複）	措置数（件、重複有）
MR+PDD	94	院外・地域支援 通園・訓練施設 保健センター（親子教室他） 保育所・幼稚園（加配他） 児童相談所	計 158（重複有） 59 34 65 0
MR（+α）	19		
PDD（+α）	27		
Asp・PDD-HF	8		
ADHD	0		
発達性言語障害	0	院内支援 ことばとコミュニケーション外来 ・非高機能 ・高機能 心理相談・評価 作業療法 言語聴覚療法	計 66（重複有） 13 2 11 25（重複有） 13 2
構音障害、吃音	1（重複有）		
反応性愛着障害	7（重複有）		
計	156（重複有）		

MR：知的障害

PDD：自閉症・広汎性発達障害

Asp：アスペルガー障害

PDD-HF：高機能広汎性発達障害

ADHD；注意欠陥多動性障害

3) 発達外来（担当：田中、菊池、南谷）

発達外来は運動発達に遅滞が疑われる乳児、ことばの遅れ・知的面および行動面で何らかの問題を抱えている幼児および未熟児新生児病棟を退院したハイリスク児や院内各科から紹介された発達障害が疑われる児を対象にしている。小児神経専門医が担当し、症状や問題点の評価をおこない経過観察するとともに、必要に応じて院内での訓練ならびに院外療育機関を紹介している。

初診患者数は506名で前年度に比して24名減少した。うち、院外機関からの初診紹介患者数は310名（重複有）であり25名増加した一方で、院内各科からの紹介数は214名（重複有）で26名減少した。その内訳は、医療機関からの紹介数は164名で10名増加し、保健所・保健センターからは115名であり、1名の増加であった。また、院内各科からは未熟児・新生児科からの紹介が最も多く100名（47%）であり、以下、耳鼻咽喉科38名、遺伝科24名、総合診療科13名、整形外科12名であり、上位3科に変化はなかった。

初診外来待機期間は2カ月前後であり、前年度と同様であった。初診患者の年齢分布は、0歳、1歳は合わせて233名で前年度とほぼ変わらず、2歳は78名で14名減、3歳は54名で著明に減少（28名）した一方で、4歳は58名（9名増）、5歳は46名（3名増）、6歳以上は38名（13名増）であり、3歳以下の幼児の減少が著しかった。

疾患については若干の増減はみられたものの診断の傾向は変わっていない。自閉症・広汎性発達障害は161名（7名減）、32%を占めた。次いで精神遅滞は107名（19名減、21%）、ハイリスク未熟児・新生児は67名、14名減であったその比率は例年とほぼ同様（13%）であった。

（南谷幹之）

紹介元	患者数(名)
院内各科（10名以上）	214（重複有）
未熟児・新生児科	100
耳鼻咽喉科	38
遺伝科	24
総合診療科	13
整形外科	12
院外機関	310（重複有）
医療機関	164（重複有）
保健所・保健センター	115
療育・通園教育	20
	2
福祉・児童相談所	0
その他	9
計	524（重複有）

診時診断（含疑い）	患者数(名)
自閉症・広汎性発達障害	161
精神遅滞	107
ハイリスク未熟児・新生児	67
筋緊張低下	50
染色体異常・奇形	2
正常範囲	15
言語発達障害・吃音・構音障害	20
難聴	13
shuffling baby	7
脳性麻痺・筋緊張亢進	13
多動症	4
環境要因・愛着障害	6
その他	19
計	511（重複有）

初診時年齢	患者数(名)
0歳	109
1歳	123
2歳	78
3歳	54
4歳	58
5歳	46
6-9歳	38
計	506

4) 装具診

装具診は、毎週火曜日の午後3:00～4:00に行われている。整形外科医師、リハビリテーション科医師、理学療法士、義肢装具師が連携して患児を個別に十分検討して、装具などの処方、作成までを一貫して行っている。また第3週の火曜日には、seating clinicを開設し、複数の専門業者と協力して車椅子、座位保持装置などの作成を行っている。

整形外科医、リハビリ医、PTとが時間を割いて個別の症例について検討する機会となっており、装具療法の限界の患児についての手術適応についても話し合いを行っている。

4 多職種プログラム外来

多職種外来の内容は表に示すとおり施行した。

名称	対象	スタッフ	回数	目的
DK外来	0歳・1歳のDown症児	遺伝科医師 PT・OT・心理士・栄養士・看護師・ケースワーカー・歯科衛生士	月1回	発育支援 両親の心理的援助 環境の整備
SH外来	重症心身障害児	神経科医師 PT 看護師	年1回	水中運動療法の導入
PW外来	プラダーウィリ症候群の児	医師 PT・OT・栄養士 看護師・心理士 ケースワーカー	年1回	運動感覚機能評価 (JPAN)
すくすく外来	超低出生体重児	医師 看護師 PT・OT・ST 心理士・栄養士	年3回	・超低出生児の特性や成長・発達に合わせた接し方などの理解を促進し、育児支援を行う ・スクリーニング
もぐもぐ外来 (哺乳摂食評価外来)	哺乳・摂食障害のみられる児	医師・歯科医師 看護師 PT・ST・OT・ 心理士・栄養士	月1回	哺乳摂食場면을観察・評価し治療方針を決定する
難聴ベビー外来	0歳の難聴児	耳鼻咽喉科医師 ST 看護師 ケースワーカー 音楽療法士 (ボランティア)	月1回	新生児聴覚スクリーニングで難聴と診断された児の耳鼻科的ケア・補聴器適合・両親への援助・音楽療法
ことば・コミュニケーション外来	広汎性発達障害児	神経科・精神科医師 ST	週1回 全3回 コース	広汎性発達障害のある児の両親へ、障害の特徴の理解を促し、特性に合わせた支援の方法を指導する
かぶと虫外来	二分脊椎児	医師・看護師 PT・OT・栄養士 歯科衛生士 ケースワーカー	年1回	二分脊椎児の両親に対し、障害の特徴の理解を促し、育児支援を行う
気管切開外来	気管切開をしている児	耳鼻科医師・ST 相談室看護師	月1回	気管切開をしている児の育児支援、コミュニケーションの支援、両親への援助を行う

1) DK外来（ダウン症候群総合支援外来）

DK外来は診断後（主に乳児期）から1年間のプログラム制外来である。今年度は第39期、40期生が新たに参加した。

2) PW外来

プラダーウィリー症候群の継続的総合支援をめざす外来である。本年度は第48回外来として学童期以降の人を対象に『プラダーウィリー症候群の運動・感覚機能の評価』（担当：作業療法士・理学療法士；11月24日）、第49回外来として乳幼児期の子どもを対称に『プラダーウィリー症候群と健康管理』（担当：遺伝科；12月13日）をそれぞれのテーマとして行った。

5 コメディカル業務

1) 理学療法

平成23年度の初診患者数は213名で昨年度とほぼ同数であり、疾患別内訳もほぼ例年通りであった。【表1】

総受診者数は昨年度より255件増加し、取得単位数は705単位減少した。これは、入院の件数が増加（588件）したことによる。【表2】急性期の呼吸援助やポジショニングの依頼も多く、看護師への全体研修も今年度は2回開催した。

非常勤職員（育児休暇代替）が2年目となり、複雑な臨床を単独で施行出来るようになったことが件数の増加した要因の1つである。

また今年度も、呼吸サポートチーム・褥瘡対策チーム・栄養サポートチームのメンバーとして参加し、患者サービスの向上に努めた。

(PT 吉岡明美)

表1 初診患者疾患別内訳

疾患分類	件数
中枢神経系疾患	76
運動発達遅滞	39
骨関節疾患	28
呼吸器疾患	21
染色体異常・奇形	23
悪性新生物	15
神経筋疾患	5
消化器系疾患	1
心疾患	1
その他	4
総合計	213

表2 月別診療件数内訳

月	診療	件数			診療報酬 (単位数)	初診患者数		
	日数	外来	入院	合計		外来	入院	合計
4	20	417	262	679	1186	7	9	16
5	19	377	288	665	1236	4	6	10
6	22	419	362	781	1349	8	13	21
7	20	406	370	776	1353	5	16	21
8	23	444	426	870	1484	12	14	26
9	20	409	317	726	1271	8	9	17
10	20	423	362	785	1326	7	11	18
11	20	416	371	787	1380	5	9	14
12	19	400	373	773	1288	5	10	15
1	19	406	344	750	1241	8	11	19
2	21	374	445	819	1379	7	10	17
3	21	393	393	786	1357	6	13	19
合計	244	4884	4313	9197	15850	82	131	213

2) 作業療法

作業療法外来は初診105人(昨年度100人)であった。一日平均受診者数は11.1人(昨年度10.5人)、年間延べ受診者数合計2,716人(昨年度2,601人)であった。年度当初より常勤2名、週1日非常勤2名、週3日非常勤1名の体制で従事し年間延べ受診者数は昨年度より115名増加した。初診患者について障害種別内訳は知的・精神機能の障害(広汎性発達障害や精神発達遅滞、遺伝疾患に伴う発達遅滞等)が84名(80%)、姿勢・運動の障害(脳性麻痺等)が20名(19%)、整形外科疾患が1名であった。

(OT 岡田洋一)

表1 月別患者数内訳(平成23年度)

月	診療日	患者数			一日平均患者数			初診患者			アセスメント 外来	診療報酬
		外来延べ人数	入院延べ人数	合計	外来	入院	合計	外来	入院	合計		
4	20	190	16	206	9.5	0.8	10.3	8	0	8	9	590
5	19	190	9	199	10.0	0.5	10.5	7	0	7	11	580
6	22	203	5	208	9.2	0.3	9.5	8	0	8	12	612
7	20	209	1	210	10.5	0.1	10.6	7	0	7	12	611
8	23	242	0	242	10.5	0.0	10.5	10	0	10	17	716
9	20	182	9	191	9.1	0.5	9.6	7	1	8	12	560
10	20	212	16	228	10.6	0.8	11.4	8	2	10	9	670
11	20	225	17	242	11.4	0.9	12.3	8	1	9	16	700
12	19	225	10	235	11.8	0.5	12.3	8	0	8	13	683
1	19	217	11	228	11.4	0.6	12.0	7	0	7	6	661
2	21	228	30	258	10.9	1.5	12.4	12	2	14	16	741
3	21	253	18	271	12.6	0.9	13.5	7	2	9	16	789
合計	244	2576	142	2718	10.6	0.6	11.2	97.0	8	105	149	7,913

表2 初診患者 障害種別内訳(平成23年度)

障害種別	件数
知的・精神機能の障害	83
姿勢・運動発達の障害	20
整形外科疾患	2
合計	105

表3 初診患者 処方依頼科別内訳(平成23年度)

障害種別	件数
発達外来	61
神経科	18
精神保健	12
脳外科	6
遺伝科	6
整形外科	2
合計	105

3) 視能訓練

平成23年度の視能訓練業務内容は表1の通りである（表1）。今年度は視能訓練士の2名体制が定着し、眼科検査および視能訓練に対応することができた。そのため、検査件数は昨年とほぼ同数であったが、訓練数は昨年より約7%増となった。

弱視訓練の新患者疾患別内訳は表2の通りである（表2）。例年通り屈折性弱視、遠視性不同視弱視が訓練の大半を占めた。

ロービジョン訓練の新患者数は4名で、未熟児網膜症、強度近視、家族性滲出性硝子体網膜症、マルファン症候群の各1名であった。

(小林順子)

表1 平成23年度月別件数

月	診療日数	検査人数	検査件数	訓練件数	弱視鏡 訓練件数	病棟検査 件数	アセスメント 外来
4月	20	409	780	16	2	29	3
5月	17	389	706	15	4	20	0
6月	21	443	836	22	1	19	0
7月	16	350	668	17	2	10	0
8月	23	555	1099	39	4	18	4
9月	19	324	599	14	3	16	1
10月	19	406	790	30	1	18	0
11月	20	383	755	24	3	23	1
12月	19	413	731	21	4	14	0
1月	18	355	656	16	2	12	0
2月	21	397	714	26	2	17	0
3月	21	457	856	20	5	28	0
合計	234	4881	9190	260	33	224	9

表2 視能訓練疾患別内訳

弱視訓練	55名
屈折性弱視	19
遠視性不同視弱視	16
斜視弱視	8
近視性不同視弱視	5
乱視性不同視弱視	3
形態覚遮断弱視	2
その他	2

4) 言語聴覚療法

平成23年度の言語聴覚療法は常勤1名（1名は10月末より復職、1名は11月末より産休・育休）、非常勤6名（週5日：2名、週2日：3名、月1日：1名）の言語聴覚士が担当した。評価、訓練の総数は1503人で、常勤1名の前年度と比べてほぼ同様の件数であった。常勤2名の平成21年度と比較すると、総数は421人減であった。初診患者数（アセスメント外来を含む）は257人、再来患者数は1246人であった（表1、2）。表1に障害別患者内訳を示し、重複症例についても示した。前年度と比較し各疾患の総件数に占める割合には大きな変化はなかった。

今年度STが主体となって行った専門外来は、発音外来、ことば・コミュニケーション外来（HFグループ）、難聴ベビー外来、補聴器外来、ことり外来（気管切開言語外来）であり、各件数を表3に示した。常勤1名の休職により、ことば・コミュニケーション外来の一部（MRグループ）は休止した。その他には大きな変化は無かった。また、もぐもぐ外来には引き続き県立リハビリテーションセンターより言語聴覚士1名が加わった。補聴器外来（638件）、聴力検査（2714件）の件数は前年度と比べて増加していた。詳細は耳鼻咽喉科の項で報告する。

（前田知佳子）

表1 疾患別患者内訳

	新患	再来	合計
MRによる言語発達遅滞	26	23	49
広汎性発達障害 （内アセスメント外来）	134 (116)	62 (0)	196 (116)
脳性麻痺	0	1	1
学習障害	5	90	95
特異的言語発達遅滞	1	7	8
失語症	2	67	69
高次脳機能障害	0	3	3
口唇・口蓋裂	33	442	475
その他の器質的構音障害	2	17	19
鼻咽腔閉鎖機能不全	2	23	25
機能性構音障害	18	91	109
舌小帯短縮症	2	0	2
運動障害性構音障害	0	34	34
音声障害	0	0	0
摂食・嚥下障害	5	16	21
気管切開後の発声障害	4	127	131
音韻障害	0	0	0
吃音	5	17	22
難聴	15	199	214
小耳症・外耳道閉鎖	1	22	23
その他	2	5	7
（内重複例）	90	409	499
計	257	1246	1503

表2 月別件数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
新患	23	14	23	17	26	15	19	36	13	18	25	28	257
再来	109	112	107	118	129	117	113	110	67	69	96	99	1246
総計	132	126	130	135	155	132	132	146	80	87	121	127	1503

表3 外来別件数

発音外来	220
ことば・コミュニケーション外来	51
ことり外来(気管切開言語外来)	94
難聴ベビー外来	194
補聴器外来	638

5) 心理

本年度は常勤心理士が3名、非常勤心理士5日／1週間で心理部門を担当した。本年度の他科からの新患依頼件数は427件、再来の継続相談件数は1993件、また心理検査件数は581件であった。他科からの新患依頼内訳(表3)では、昨年度から引き続き、発達外来からの依頼が最も多く、次いで精神科、未熟児新生児科と、この3科からの依頼が多かった。他は神経科、脳神経外科、遺伝科からの依頼が多かった。既に患者数の上限に達しているため、今年度はほぼ例年通りの件数であった。昨年度より病棟回診を開始したため、コンサルテーション件数が徐々に増加している。

(成田有里)

表1 平成23年度患者数

新患件数	427
再来継続相談延べ件数	1,993
合計	2,420
心理検査件数	581
コンサルテーション件数	61

表2 年齢別依頼内訳(平成23年度)

	男児	女児	合計
0～5(歳)	140	87	227
6～12	124	60	184
13～	9	7	16
合計	273	154	427

表3 他科からの新患依頼内訳(平成23年度)

依頼元科	人数
未熟児新生児科	79
代謝・内分泌科	1
感染免疫科	1
神経科	50
遺伝科	15
精神科	117
脳神経外科	29
発達外来	134
スクリーニング外来	1
合計	427